60 松齢橋

しょうれいばし

いまこの辺一帯は市の中心の一部になっているが、明治はじめまで旧福島市と阿武隈川対岸の渡利をつなぐ橋はなく、渡し船で往来の便をしのいでいた。しかし出水があると、たちまち交通は数日にわたって途絶えてしまい、無理に舟を出すと時に転覆の事故を起こす始末で、とかく村民の悩みの種だった。

渡利村長羽田溜吉、福島町長湯浅兵治等有志の寄付をえて、ようやく念願の橋ができたのは明治16年（1883）、船数15艘を連ね、その上に木製脚を立ち上げた全長120ｍ余のこの舟橋は、土地の大評判で、大判の３枚組の錦絵が大いに売れたという。松齢橋の命名者は県令の三島通庸、「ねがわくは松齢鶴年永くその齢を保たんことを」、橋の長命を祈っての命名であった。橋の南詰近くの渡利七社宮の境内には、この舟橋完成のときの石碑が２基残っていて、往時の舟橋の構造が詳細に記されている。

しかし祈念の甲斐なく、舟橋は洪水のたびに流失を繰り返した。そこで明治41年に木橋を架けたが３年後に流失、再建したところ、これも数十日で流されてしまった。ということで、明治44年にまたもとの舟橋にもどされた。

鋼鉄の橋の松齢橋が誕生するについては、二つの条件があった。一つは県道編入を想定して堅牢な橋を架けること、一つは大径の水道管を添加できることであった。

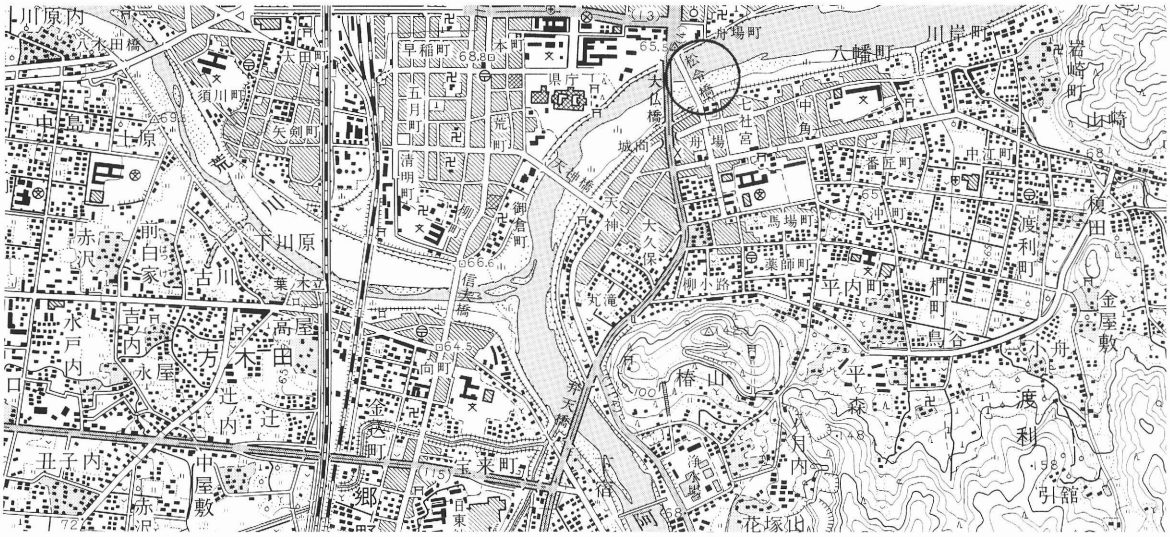
大正12年暮の起工式における福島市長の式辞記録には、「この鉄橋は本邦架橋の権威たる金井彦三郎氏の緻密精確なる設計になり……」という文章がみえる。金井彦三郎は明治22年から39年まで東京府または市役所にあって、原龍太とともに東京の鉄の道路橋のほとんどすべてを手がけた、いわば東京の橋草創期の恩人ともいえる人物である。当時の地元新聞によれば、設計は福島市内で行なわれ、金井彦三郎は施工管理まで行なった由である。

ボーストリングにもいろいろあるが、東京に残る八幡橋のようなアーチ橋に近いものと違って、松齢橋は完全なトラス形式である。全格間にアイバーの引張斜材がＸ形に組み込まれているので、正確にいうとプラットトラス形式のボーストリングトラスということになる。

大正14年の完成以来70余年、昭和59年（1984）の大補修をはじめ、補修は何回か行なわれたが、橋の外観は創架当時そのまま、水道管は今も福島市市心部の市民に飲料水を供給している。この橋に添加されている水道管の重量は、懸架材も加えて約350㎏／ｍと計算されている。〔ＫＳ〕

竣工年月：大正14年（1925）５月
所在地：福島県福島市
河川名：阿武隈川
橋長・幅員：175.8ｍ×5.5ｍ
径間数・支間長：４×41.2ｍ
形　式：ボーストリングトラス（リベット結合）

〈1992年11月，撮影・田島二郎〉



（1:25,000　福島南部）